

令和4年（2022）8月9日

奈良国立博物館

第74回 正倉院展

The 74th Annual
Exhibition of Shōsō-in Treasures

報道発表資料

[1] 主 催 奈良国立博物館

特別協力 読売新聞社

協 賛 岩谷産業、SGC、NTT西日本、関西電気保安協会、京都美術工芸大学、
近畿日本鉄道、JR東海、JR西日本、シオノギヘルスケア、ダイキン工業、
ダイセル、大和ハウス工業、中西金属工業、丸一鋼管、大和農園

協 力 NHK奈良放送局、Osaka Metro、奈良交通、奈良テレビ放送、日本香堂、
仏教美術協会、読売テレビ

[2] 会 期 令和4年（2022）10月29日（土）～11月14日（月）

会期中無休

開館時間 午前9時～午後6時

金曜日、土曜日、日曜日、祝日（11月3日）は午後8時まで

※入館は閉館の60分前まで

[3] 会 場 奈良国立博物館 東新館・西新館

[4] 観覧料金 **観覧には「前売日時指定券」の予約・発券が必要です。**

事前予約のみで、当日券の販売はありません。

当館チケット売場での販売はありません。

詳細は【別紙】をご覧ください。

[5] 出陳宝物 出陳宝物 59件（北倉9件、中倉26件、南倉21件、聖語蔵3件）

うち8件は初出陳

※出陳宝物リストは別紙

[6] 展覧内容

正倉院宝物は、かつて東大寺の倉であった正倉院に収納されていた品々で、その数はおよそ9000件を数えます。正倉院展は、これらの中から毎年60件前後が厳選され公開される展覧会で、今年で74回目を迎えます。今年の正倉院展も例年と同様に、美しい工芸品から、奈良時代の世相がうかがえる文書まで、様々な品が出陳されます。

天平勝宝8歳（756）6月21日、聖武天皇の四十九日に合わせ、後の光明皇后が東大寺盧舎那仏に献納した品々は、正倉院の中でもとりわけ由緒ある宝物として知られています。今年はその中から、纖細かつ華やかな文様が施された漆背金銀平脱八角鏡（黒漆地に金銀飾りの鏡）などの工芸品のほか、黄熟香（蘭奢待）と並んで名香の誉れ高い全浅香（香木）が出陳されます。

聖武天皇と光明皇后の娘・称徳天皇にまつわる銀壺（大型の銀製の壺）も見逃せません。この品は、天平神護3年（767）2月4日、称徳天皇が東大寺に行幸した際の大仏への献納品と考えられ、その破格の大きさもさることながら、表面に施された騎馬人物や鳥獣の細かな線刻文様が目をひく逸品です。

さらに今年は、奈良時代の装いに関連する宝物が多数出陳されるのも特徴です。犀角魚形（腰飾り）や彩絵水鳥形（鳥形の飾り具）は、高貴な身分の人が腰帯から下げたり、衣服に縫い付けたりして用いたと考えられ、わずか数センチの大きさでありながら、魚鱗や鳥翼に施された精密な細工には目を見張ります。また、犀角や象牙といった珍貴な素材を用い、美しく装飾された斑犀把綠牙撥鏤鞘金銀莊刀子（腰帯から下げた小刀）は、実用性をも兼ね備えた装身具の一種として注目されます。

奈良時代は仏教が国家鎮護の役割を担い、法会が盛んに営まれていました。伎楽面力士（楽舞の面）は、天平勝宝4年（752）の大仏開眼会で使用されたことが墨書から判明する品で、表面に施された鮮烈な赤が華やかな法会の情景を浮かび上がらせるようです。粉地彩絵几（献物をのせた台）の鮮やかな彩色文様や、金銅幡（金銅製の旗）に見るバラエティーゆたかな透彫文様もまた、法会のきらびやかさを引き立たせたことでしょう。このほか、空海が本格的な密教を伝える以前の古式の法具・鉄三鉢（古密教の法具）は、厳かな法会の様子を今に伝えています。

これら数々の宝物は、伝統を重んじる人々の弛まぬ努力によって守り伝えられてきました。会場の最後に展示する錦繡綾絶等雜張（東大寺屏風に貼り交ぜられた染織品）は、江戸時代の天保4年（1833）の開封を機に屏風に仕立て整理された奈良時代の古裂の断片で、正倉院における保存整理のさきがけとして象徴的な意義をもっています。これらの染織品を通して、現代に至る宝物伝承の取り組みに思いを馳せていただければと思います。

[7] 主な出陳宝物

北倉 24	白石 鎮子 寅・卯 (大理石のレリーフ)	1 箇
北倉 41	全浅香 (香木)	1 材
北倉 42	漆背金銀平脱八角鏡 (黒漆地に金銀飾りの鏡)	1 面
北倉 44	鸚鵡荔枝屏風・象木荔枝屏風 (ろうけつ染めの屏風)	2 扇
南倉 13	銀壺 (大型の銀製の壺)	1 口
南倉 70	鳥獸花背円鏡 (靈獸と葡萄文様の鏡)	1 面
中倉 138	金銀平脱皮箱 (金銀飾りの皮箱)	1 合
中倉 117	彩繪水鳥形 (鳥形の飾り具)	2 枚
南倉 1	伎楽面 力士 (楽舞の面)	1 面
中倉 177	粉地彩繪几 (献物をのせた台) 附 白橡綾几褥	1 基
南倉 156	金銅幡 (金銅製の旗)	1 旗
南倉 53	鉄三鉢 (古密教の法具)	1 口
中倉 20	続々修正倉院古文書 第四帙第七卷 [二部大般若経用度申請解案] (写経事業の予算書)	1 卷
北倉 182	錦繡綾絶等雜張 (東大寺屏風に貼り交ぜられた染織品)	23 片 附 1 卷

解説

※法量の単位は、寸法 = センチメートル、重量 = グラム

※写真提供 = 宮内庁正倉院事務所

[出陳番号1]

北倉24

白石 鎮子 寅・卯 (大理石のレリーフ) 1箇

前回出陳年 = 昭和62年 (1987)

縦21.5 横33.3 厚4.7 重8854

青龍・朱雀・白虎・玄武の四神や十二支が2つずつ絡まり合う様子を浮き彫りであらわした大理石製のレリーフ板で、正倉院には計8箇が伝わる。本品では十二支の寅と卯が絡まる意匠が表される。2体の動物が絡まる意匠は遊牧民族のスキタイの文化圏で好まれた動物鬪争文に淵源があるとみられるが、中国由来の四神・十二支が用いられる点に東西の文化交流がうかがえる。明治時代の宝物整理に際して『国家珍宝帳』記載の「白石鎮子」に比定されたが、現在では別物と考えられており、正確な用途も不明である。



[出陳番号3]

北倉41

全淺香 (香木) 1材

前回出陳年 = 平成20年 (2008)

長105.5 重16650

正倉院に伝わった大きな沈香 (ジンチョウゲ科の樹木の幹に樹脂などが沈着してできた香木)。「蘭奢待」として著名な黄熟香 (中倉135) とともに「両種の御香」と呼ばれる。『国家珍宝帳』に記載された「全淺香一村重大卅四斤」に当たり、東大寺盧舍那仏への献納品であった。表面には大小の切削痕があり、過去に幾度か切り取られたことを物語る。科学調査により、ベトナム北部やその周辺地域に産する材と近似することが指摘されている。



[出陳番号5]

北倉42

漆背金銀平脱八角鏡 (黒漆地に金銀飾りの鏡) 1面

前回出陳年 = 平成21年 (2009)

長径28.5 縁厚0.6 重2928.6

天平勝宝8歳 (756) 6月21日に光明皇后が東大寺盧舍那仏に献納した品の一つ。八花形に鋳造された銅鏡の背面に黒漆を塗り、金、銀の薄い文様を配し、さらに漆で塗り込めた上で、文様部分の漆膜を剥いで仕上げる。中央には宝相華文を、その周囲には飛鳥や鳳凰、唐草文をあしらう。流麗に切り出された文様は纖細でありつつ、全体として華やかさを感じさせる優美な鏡である。



[出陳番号6]

北倉44

鸚鵡臘纈屏風・象木臘纈屏風 (ろうけつ染めの屏風) 2扇

[鸚鵡] 前回出陳年 = 平成9年 (1997) ／平成22年 (2010) (東京国立博物館)

長163.0 幅56.3 本地長154.6 幅52.5

[象木] 前回出陳年 = 平成7年 (1995) ／平成22年 (2010) (東京国立博物館)

長163.0 幅56.1 本地長154.5 幅52.5

『国家珍宝帳』に記載される「臘纈屏風十畳〈各六扇〉」のうちの2扇。鸚鵡屏風（左）は齊衡3年（856）の宝物点検記録『雑財物実録』に記載される「熊鷹鸞鳥武麟屏風」の1扇、象木屏風（右）は同じく「橡地象羊木屏風」の1扇だったと考えられる。いずれも文様部分を蠟で防染を施した後に染料で重ね染めし、（熱で蠟を除去して）文様を染め抜く「ろうけつ染め」の技法が用いられる。



[出陳番号9]

南倉13

銀壺 (大型の銀製の壺) 1口

前回出陳年 = 平成7年 (1995) ／平成22年 (2010) (東京国立博物館)

口径42.9 胴径61.3 総高46.6 壺重35100 台重7100

大きく膨らんだ胴に大きな口が開く。底が丸くすぼまつた鉄鉢形の器で、別作りの高台の上に載る。本体、高台ともに銀製で、胴の表面には、馬に乗った人物が山野で鹿や羊、猪などの獲物を追う様子を刻線であらわしている。その絵柄は雄大で生き生きとしており、奈良時代の狩獵文の代表とも目される優品である。本体の底に天平神護3年（767）2月4日の年紀が刻まれている。『続日本紀』によれば、この日に称徳天皇（聖武天皇の娘）が東大寺に行幸しており、銀壺はこの折に献納されたと推定される。なお、正倉院には本品とほぼ同形同大で狩獵文様もよく似た銀壺がもう1口伝わっており、一対で献納されたものとみられる。



[出陳番号10]

南倉70

鳥獸花背円鏡 (靈獸と葡萄文様の鏡) 1面

前回出陳年 = 平成22年 (2010)

径29.7 縁厚2.0 重5009.0

白銅 (錫を多く含む青銅。銀色味が強く、硬い) 製の大型の海獸葡萄鏡。鏡の背面には、たくさんの鳥獸と葡萄唐草文様が精密に鋳出されている。中央には鹿に噛みつく狻猊 (獅子に似た靈獸) をあらわす鉤 (ひもを通す膨らみ) を置き、その周囲に狻猊の親子がたわむれる様子を生き生きとあらわす。さらにその外側には、狻猊や孔雀、鹿、鶴、有翼馬、鳳凰、鴛鴦などが2匹一組のつがいとなって駆け巡っている。いずれの文様もシャープで、保存状態も良好である。中国・唐で作られたものとみられる。本品と同型の鏡が千葉・香取神宮に伝来し、国宝に指定されている。



[出陳番号11]

中倉138

金銀平脱皮箱 (金銀飾りの皮箱) 1合

前回出陳年 = 平成19年 (2007)

縦33.0 横27.0 高8.6

黒褐色地に金銀であらわされた文様が浮かび上がる豪奢な箱である。蓋表は中央に鳳凰、周囲には鳥と花枝を組み合わせて旋回するように配置する。動物の皮をベースに何重にも漆を塗り込めて成形されている。漆を重ねる際、文様の形に切った金銀の薄板を貼り付けて、板に線状の彫り込みを加えて図柄を表し、その上から漆を塗り込めたあとに金銀の部分の漆を剥いでみせる「平脱」の技法を用いて作られている。



[出陳番号19]

中倉117

彩繪水鳥形（鳥形の飾り具） 2枚

前回出陳年 = 平成20年（2008）

長2.6 厚0.2

ヒノキの薄板を飛翔する鳥の形に切り取った一対の小品。かつては水鳥をあらわすと考えられていたが、頭の冠羽や翼の白黒の横斑に特徴のあるヤツガシラと同定されている。背に緑色、腹に白色、くちばしに赤色を塗り、冠羽・翼・尾にはカケスの初列雨覆という羽毛を貼り付けて横斑をあらわしたうえ、金箔の小片を蒔く。手の込んだ精緻な細工が美しい。衣服の装飾として用いられた可能性がある。



[出陳番号31]

南倉1

伎楽面 力士（樂舞の面） 1面

前回出陳年 = 平成21年（2009）

縦35.9 横23.5 奥行31.8

伎楽に用いる仮面で、髻を結い、口を閉じて下唇を噛み締める特徴から役柄は力士にあてられる。天福元年（1233）に泊近真が著した『教訓抄』によれば、力士は吳女に言い寄り追い掛け回していた鳶鷺を懲らしめる役どころという。左耳上半を除いてキリの一材から彫り出し、表面には彩色を施す。近年の調査で、ひげには猪毛を植毛していることが判明した。面裏に墨書きがあり、天平勝宝4年（752）4月9日の大仏開眼会のために将李魚成が制作したとわかる。



[出陳番号37]

中倉177

粉地彩絵几 (献物をのせた台) 1基
つけたり しろつるばみあやの き じょく
附 白 橡 綾 几 褵

前回出陳年 = 平成23年 (2011)

縦34.0 横38.5 高9.2

仏前に献物を供えるための台で、天板と同じ大きさの上敷き (袱) が付属する。ヒノキの一枚板で作られた天板に、花葉形に彫出された華足をつけており、華足を彩る青系・赤系・緑系・紫系の鮮やかなグラデーション (暈綺彩色) が目を惹く。天板裏面の墨書と貼紙によって、正倉院に納められる以前は、千手觀音菩薩像や銀の盧舍那仏像が安置されていた東大寺千手堂のものであったことがわかる。



[出陳番号42]

南倉156

金銅幡 (金銅製の旗) 1旒

前回出陳年 = 平成7年 (1995)

長170 身幅15.5

幡は仏教法会で掲げられる旗で、仏堂内を飾る装飾具としても使われる。正倉院に伝わった幡の多くは織物製であるが、本品は金属で作られており、法隆寺献納宝物の灌頂幡 (東京国立博物館蔵) とともに古代の金銅幡の貴重な遺品である。幡身には花唐草、亀甲、花卉、双鳥など種々の文様が透彫され、その文様の透かし目などには多くの鈴がつけられる。その豪華な作りは、本品が掲げられた法会や仏堂を華やかに演出したことであろう。



[出陳番号44]

南倉53

鉄三鉤 (古密教の法具) 1口

前回出陳年 = 平成23年 (2011)

長28.8 幅11.3 重336.2

鉄製鍛造の仏具。把の両端に鉤形をあらわし、三本の鉤を有することから、三鉤杵であるとわかる。中鉤・脇鉤ともに鋭い逆刺をあらわし、さらに中鉤には把との間に節を付けるなど、古代インドの武器を源流とする金剛杵の性格が強くあらわれている。このような形の三鉤杵は、空海による密教請来以前の古密教 (雑密) の儀礼で用いられたと考えられる。本品には収納箱 (素木三鉤箱・南倉53) が付属しており、本展には収納箱も合わせて出陳される。



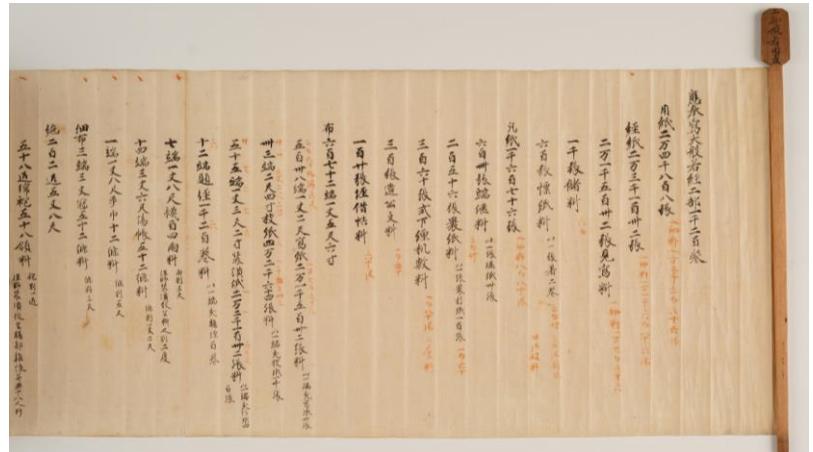
[出陳番号54]

中倉20

続々修正倉院古文書 第四帙第七卷 [二部大般若経用度申請解案] (写経事業の予算書) 1巻

初出陳

奈良時代の官営写経所では、天平宝字6年 (762) 12月から翌7年4月にかけて、『大般若経』1部600巻を2セット、計1200巻を書写する事業が進められた。図版の文書は、事業の開始にあたり、同6年12月16日付けで作成された予算書である。紙や筆、墨といった写経に直接かかわる物品のほか、作業着用の絹等、写経従事者への給与や日々の食料、さらには刀子や辛欅などの雑具について、使用予定の数量が詳しく記されている。



[出陳番号59]

北倉182

錦繡綾純等雜張 (東大寺屏風に貼り交ぜられた染織品) 23片 附1巻

初出陳

14号 縦20.5 横25.5 (左)

15号 縦21.5 横20.9 (右)

東大寺屏風にかつて貼り交ぜられていた染織品（写真はそのうち14号（左）・15号（右））。天保4年（1833）の正倉院宝庫御開封に際して古裂の断片を貼り交ぜた屏風が作られ、後に東大寺屏風と呼ばれるようになった。これは正倉院の染織品に対する初の本格的な整理としても重要な意味を持っている。東大寺屏風はその後虫損が進んだため、昭和26年（1951）から3年をかけて解体され、屏風下地と染織品が別々に保存されることとなった。



[8] 普及事業

公開講座

- ① 10月29日（土） 「正倉院宝物の保存—宝物を覆う—」
高畠 誠 氏（宮内庁正倉院事務所保存課保存科学室員）
- ② 11月12日（土） 「正倉院の仏具—奈良時代の寺院と法会の世界—」
三本 周作（奈良国立博物館学芸部研究員）

【時 間】午後1時30分～3時（午後1時開場）

【会 場】奈良国立博物館 講堂

【定 員】各90名（事前申込制）

※詳細は奈良国立博物館公式ホームページ等で決まり次第お知らせいたします。

[別紙] 観覧料金（前売日時指定券）

一般券	2,000円
高大生券	1,500円
小中生券	500円
キャンパスメンバーズ学生券	400円
研究員レクチャー付き鑑賞券	詳細は奈良国立博物館公式ホームページ等で 決まり次第お知らせいたします。
無料指定券 障害者 1名	無料
無料指定券 障害者 1名 + 介護者 1名	※ただし、無料指定券の 予約・発券が必要
無料指定券 奈良博プレミアムカード	

観覧には「前売日時指定券」の予約・発券が必要です。当日券の販売はありません。

当館チケット売場での販売はありません。

購入方法

販売開始日時 9月26日（月）午前10時 先着順

ローソンチケット [Lコード：58885]

ローソン及びミニストップ各店舗、電話受付（TEL:0570-000-028）、または公式サイト（<https://l-tike.com/>）

- 最終販売日時は、購入方法により異なります。売り切れ次第販売を終了します。
- 前売日時指定券には販売枚数の制限があります。
- 1回につき4枚までの購入が可能です。ただし、無料指定券を予約できる枚数は1回につき1枚までです。
- 購入後の日時変更及び払い戻しはいたしかねますので、ご注意ください。
- 団体料金の設定はありません。
- 高大生券・小中生券を予約・発券された方は、観覧当日に学生証などの提示が必要です（小学生を除く）。ご提示いただけない場合には、通常料金（一般券2,000円、高大生券1,500円）との差額をお支払いいただきます。
- キャンパスメンバーズ学生券・無料指定券を予約・発券された方は、観覧当日に証明書・会員証などの提示が必要です。ご提示いただけない場合には、通常料金（一般券2,000円、高大生券1,500円、小中生券500円）との差額をお支払いいただきます。

- ・ 障害者手帳またはミライロ ID（スマートフォン向け障害者手帳アプリ）をお持ちの方（介護者 1 名を含む）・奈良博プレミアムカード会員（1 回目及び 2 回目の観覧）は無料ですが、無料指定券の予約・発券が必要です。 なお、未就学児は無料指定券の予約・発券は不要です。

入館時間区分

- ・ 前売日時指定券購入時に入館時間（開館時間から原則 1 時間毎）の指定が必要です。最終入館時間は午後 5 時、金・土・日曜日及び祝日は午後 7 時です。

入館・観覧に関して

- ・ 指定された日時以外の入館はできません。
- ・ 各時間枠の入場開始時間は大変混雑いたします。本展は入替制ではありませんので、前売日時指定券に記載された入場可能時間内に分散してご来館いただきますようお願いいたします。
- ・ 入館待ち列にお並びいただけるのは、入場開始時間の 10 分前からです。 それ以前に来館されても、列にお並びいただくことはできません。
- ・ 指定された時間内であっても、展示会場内の混雑回避のため、入館をお待ちいただく可能性がございます。
- ・ 入館前に検温を実施いたします。また、マスクの着用をお願いいたします。
- ・ 本展は入替制ではありませんが、展示会場内の混雑を避けるため、入場後 1 時間程度を目処に鑑賞をお願いいたします。
- ・ 前売日時指定券では、名品展（なら仏像館・青銅器館）を観覧することはできません。 ただし同券をお持ちの方は、名品展（なら仏像館・青銅器館）を割引料金（一般 200 円（通常 700 円）、大学生 100 円（通常 350 円））で観覧することができます。なお、高校生以下及び 18 歳未満の方・70 歳以上の方・障害者手帳またはミライロ ID（スマートフォン向け障害者手帳アプリ）をお持ちの方（介護者 1 名を含む）は無料です。

今後の状況に関して

新型コロナウイルス感染拡大状況により、開催内容を変更する場合があります。

お問い合わせ

奈良国立博物館 Nara National Museum

〒630-8213 奈良市登大路町50 (奈良公園内)

電話 ハローダイヤル 050-5542-8600

奈良国立博物館ホームページ <https://www.narahaku.go.jp/>

正倉院展ホームページ <https://shosoin-ten.jp/>

〈交通案内〉

近鉄奈良駅下車徒歩約15分。

またはJR奈良・近鉄奈良駅から市内循環バス外回り「氷室神社・国立博物館」下車すぐ

広報用画像・記事掲載に関するお問い合わせ

第74回正倉院展 広報事務局 (株式会社ミューズ・ピーアール)

担当：大山、藤巻、末田

info@musepr.co.jp

〒107-0052 東京都港区赤坂9-1-7 赤坂レジデンシャル770

電話 03-6804-5045 FAX 03-5785-2627

オンラインリリース

<https://www.artpr.jp/prs/2022shosoin/>

【画像掲載にあたってのお願い】

- 正倉院宝物の画像は、宮内庁正倉院事務所より奈良国立博物館で開催する「第74回正倉院展」の広報用として使用許可を頂いているものです。展覧会紹介の原稿作成以外には使用しないでください。
- 画像をご使用の際は、原稿の中に必ず、
①展覧会名「第74回正倉院展」、②会場名「奈良国立博物館」、③会期「10月29日～11月14日」、④「宝物名」を明記してください。
- 宝物は、全図で使用してください。改変、部分変更、文字のせはできません。
- 使用後はデータを破棄または消去してください。
- WEBへの掲載は展覧会会期中までとしてください。会期終了後はデータを削除してください。
- ご掲載いただいた場合、掲載紙・誌、または媒体(DVD等)をお送りください。
- 写真提供者を表示する場合は、「宮内庁正倉院事務所」と記してください。

報道発表資料に関するお問い合わせ

奈良国立博物館 学芸部情報サービス室
電話 0742-22-4463 FAX 0742-22-7221

[奈良国立博物館プレスリリース配信について]
下記にご登録いただくと、プレスリリースなどの情報を随時配信いたします。

登録URL

https://e.bme.jp/bm/p/f/tf.php?id=narahaku_pr&task=regist

